

日本におけるキリスト教受容の問題

——遠藤の『沈黙』から『深い河』まで——

兼子盾夫

0. 受容(変容)という概念の再検討の必要性

上記の遠藤の作品を通じて、日本におけるキリスト教受容の問題を論じるにあたり、私はまず次の問題点を指摘しておきたい。それは従来の受容(変容)という概念は、この問題を論じるのにかつてほど有効でないことである。従来の、例えば武田清子氏による受容の型の分類によれば、内村鑑三は「対決型」と「接木型(土着型)」の両者を兼ねる型に、有島武郎は「背教型」に分類された。しかし遠藤にこの分類をあて嵌めようとすれば、どの型が適用されるのだろうか。遠藤は数々の作品を通じて西欧的なキリスト教を日本の精神的風土に根づかせようと試みたという点で、一応は「接木型(土着型)」に分類されるのだろうか、彼の最新作における試みは、もはや日本におけるキリスト教の受容(変

容)という次元では捉え切れないように感じるのである。

その理由は主として二つある。一つは受容(変容)の概念の適用には、受容されるべき思想(キリスト教という一神教の価値体系)が、受容するところの精神的風土より何らかの価値として優れたものを含んでいるという前提があること。例えば内村は比喩的にはあるが、西欧のキリスト教の日本への受容を「良い実を結ぶ木を悪樹の台木に接木する」と述べている。二つめはキリスト教思想そのものが、キリスト教内部で神学的な意味において急速に変化しつつあることである。

たしかに『沈黙』には、故亀井勝一郎氏の指摘や遠藤自身の述懐にもある如く、日本の宗教、殊に浄土真宗の影響が感じられた。しかし最新作における遠藤のキリスト教理解は宗教多元主義に立つキリスト教理解で、当然のこととして、それは西欧キリ

スト教そのものではないし、また日本的に土着化された西歐的キリスト教でもない。それ故、以上の二点からキリスト教受容という問題の捉え方そのものが既に問題であり、むしろ今後の課題として受容という認識の枠組み自体を再考する必要があるのではないだろうか。

ここでは遠藤周作を取り上げ、殊に『沈黙』から『深い河』における氏のキリスト教理解とそれに対する批判の紹介を通じて、日本におけるキリスト教受容（今のところ他の言葉が見あたらない）の問題として、それらの作品が何を提起しているかを探る。

1. 遠藤・井上におけるカトリシズム

—母性的原理としてのカトリシズム

ブネウマを芭蕉の風雅と見立てキリスト教を日本の自然観から捉え直そうとする井上洋治師は『日本とイエスの顔』の中で遠藤のイエス理解を次のように高く評価している。「カトリック・プロテスタントの別なく、明治以来のキリスト教は、言わば苗を植えつけるのではなく、西洋の土壌で育った西欧キリスト教という大木をそのまま植えつけようとしていたと言えるでしょう。従って日本の武士道との結びつきを持った内村鑑三のような例外はあったとしても、全体的に見てキリスト教は、日本の精神的風土と接触し、かみ合うという所まではまだまだ行っていないかったように思います。その点、最近の遠藤周作氏の著作『死海のほとり』と

『イエスの生涯』は、そのイエス像に賛成すると否とにかかわらず、初めて深く日本の精神的風土にキリスト教ががっちりとかみ合った作品だと言えるでしょう。」

若い頃にもフランスに学んだ遠藤と井上はヨーロッパで触れたキリスト教がキリスト教本来の父性原理と母性原理のうち、父性原理を強調するあまり日本人の靈性（井上の言葉によれば求道性）にしっくり来ない宗教であるという不満を抱いて帰国した。遠藤はみずから大病との関係から、井上は日本の伝統的な自然との関わりから、キリスト教のもつ父性原理よりも母性原理に傾斜していく。

遠藤は「断っておくが、キリスト教は白鳥が誤解したように、父の宗教だけではない。キリスト教のなかにはまた母の宗教もふくまれているのである。それはたとえばマリアに対する崇敬というようなかくれキリシタンの単純なことではなく、新約聖書の性格そのものによって、そうなのである。新約聖書は、むしろ「父の宗教」的であった旧約の世界に母性的なものを導入することによって、これを父母的なものとしたのである。」と語っている。

遠藤は同伴者イエスのなかに母性原理を見いだし、井上は日本人の自然との交歓のうちに同行者、同朋者イエスを見いだす。二人の違いは遠藤には最初から人間存在の深い闇への洞察が見られることで、人間の持つ闇（罪、死への志向）の部分を見ることで

ある。これは彼の病歴、彼の人生における死との距離とおそらく無縁ではないだろう。遠藤が人間の業を重視する意味で宗教的であると云えるならば、井上にはむしろ倫理的、審美的な傾向が強いと言えよう。

2. 『沈黙』…ともに苦しむ神、同伴者イエス

「日本人の私の体に合う和服にカトリシズムを仕立て変えよう」との遠藤の実験はキリシタン禁教時代の転び、パレンを描いた『沈黙』において真摯に試みられた。五島、長崎、江戸を舞台に展開される時代小説『沈黙』の主題は、強大な国家的政治的権力と弱者の当為の相剋という枠組みのなかに、遠藤の個人的なユダ論を展開させたものである。遠藤の脳裏には永い間、裏切り者ユダに対するイエスの言葉「往きて汝の好むところをなせ」(ヨハネ 13:33)、「生まれざりしならば、寧ろ彼にとりて善かりしものを」(マタイ 23:15)が了解不能のものとして澱のように残っていた。『黄色い人』ではイエスはユダを見捨てる。しかし『その前日』を経て遠藤は裁くのではなく、裏切り者の痛みを憐れみ、ともに苦しむイエス像を描こうとした。裏切り者のユダでさえ決して見捨てはしないイエス、そう言う意味では『沈黙』は遠藤のユダ論だ。たとえば遠藤が強い影響下にあるG・グリーン(グリン)の『権力と栄光』では混血児の青年がユダを演ずるが、沈黙では「よわかもん」のキチジローがユダである。ロドリゴはおそらくペテロの

役割を演じているのだろう。

だが勿論、遠藤のユダ論はイエス理解において西欧のそれとは自ずから異なる。「私にはイエスが無能力者であって、奇跡なんか行えなかった人で、そのかわり、みんなと一緒に苦しもうとした人であるというイメージがあるんです。イエスはこの地上ではすべてのことで失敗する。」と遠藤は後に対談で語る。ここには言うまでもなく「イザヤ書」にある虐げられた義人、迫害される預言者の惨めな姿がイエスと二重写しになっている。イエスは威厳に満ちた西欧のキリスト教会のイエスではなく、くたびれた顔をして瘦せて惨めださえる。そのイエスだからこそ「踏むがいい。おまえの足の痛みは私が一番、よく知っている。私はお前たちに踏まれるためにこの世に生まれ、十字架を背負ったのだ」と言えるのだ。人間の苦しみをよく知っているイエスだからこそ敢えて踏むがよいと言うのだ。このイエスは人間の苦しみを天のかみからみそなわす神ではなく、ともに苦しもうとする同伴者イエスなのだ。

つまり動機はともあれ棄教してしまうロドリゴの弱さを正当化する作品ではなく、ともに苦しむイエスこそ日本人のイエス像として意味があることをこの作品の中で遠藤は主張する。その限りにおいて遠藤の極めて野心的で危険な試みは成功した。

実際、G・グリーンをはじめ何人かの外国の作家はこの作品を日本人カトリック作家にしか書けない興味深いものと受けとめ、

賛辞を捧げている。もっとも遠藤自身の回想によると、この作品は当時の教会関係者の間では概ね不評で禁書に近い扱いを受けたそうである。因みに粕谷甲一師は『沈黙』の発表の直後に次のように批判した。「此の作品の最大の功績は、日本においてキリスト教が直面する……本質的な問題（日本におけるキリスト教の土着化……筆者）の所在を明らかにしたことである。しかしそれに伴う最大の危険は、その問題の解決への意欲そのものを内部から崩してしまふことと可能性をもっていることである」。私自身も個人的に当時、それに近い体験をした記憶がある（渋谷ドミニコ教会の青年会顧問をしておられた土居健郎氏に「そんなものを君は読んでいるのか。読んではいけない」と強く叱られた）。

3. 『沈黙』の三つの問題提起

『沈黙』には三つの問題提起があった。それらは1.汎神論的文化の日本の土壌に唯一神を信奉するキリスト教は根づくか。2.ユダ論（キリストはユダを許し給うたか）。そして3.キリスト教の神が愛の神なら何故、神は迫害された人間の悲痛な叫びに沈黙されたままなのか。これらの問いの2と3に対する遠藤の解答は次の如きものである。

「神は沈黙されてはいない。ともに苦しまれたのだ。」即ちロドリゴは踏み画に足をのせた時、彼はキリストご自身でも、同じ状況下では（穴吊るしの拷問に呻いている信者の苦しみを憐れみ）

棄教するであろうと思う。「私はおまえたちのその痛さと苦しみを分かち合う。そのために私はいるのだから」と言うキリストの声を聞いたような気がした。「私は沈黙したのではない。ともに苦しんでいたのだ」。彼は回想する。踏み画のキリストの顔に足をのせた時に激しい悦びの感情がロドリゴを襲う。この時、彼はキチジロー（ユダ）に対する怒りも消えた。本来、強い者も弱い者もないのだ。強い者より弱い者が苦しまなかつたのだが断言出来よう。転びバテレンのロドリゴは許しを与え、キチジローに「安心して行きなさい」と言う。

そして1.に対して遠藤は『沈黙』の最後に切支丹屋敷役人日記を付け加えることにより、一条の希望の光を提示するのを忘れなかつた。つまり遠藤にとって日本とはけつして井上筑後守が言うような、キリスト教の根を枯らしてしまう汎神論的な泥沼ではない。

4. 『深い河』のテーマ…宗教的多元主義の主張

そもそも『深い河』（黄色い人でも白い人でもない黒人たちの靈歌 Deep River）というタイトルからして象徴的である。それは此岸における諸々の違いを持つ人間、即ち富める者も貧しい者も、罪深い者もそうでない者も、さらに時には人種や宗教の違いさえ超えて、すべての死者を受け入れ、滔々と流れていく永遠の究極の実在（愛の神）の象徴である。本来、言葉の持つ重層性と

遠藤の巧みな仕掛けによって、この小説は様々なレヴェルで読者の心に語りかける。ところで今までの小説のキャラクターや主題を総動員したこの小説のテーマはそもそも何だろうか。

私はそれは遠藤が『沈黙』で提起し、彼の過去の全作品で問い続けてきた問い…非西欧的(普遍的)キリスト教は如何にして可能かという問いなのだと思う。ではその試みは成功したのか。西欧キリスト教の意味では落伍したカトリック神父(これは遠藤の示唆するところによれば、井上神父がモデルなのだが) 大津が行き倒れのヒンズー教徒を火葬場へと運ぶ、一見、虚しい無駄な仕事に従事している。「イザヤ書」に予告された惨めなイエスが大津の正体である。彼を若いときに戯れに誘惑して捨てた女、美津子は永遠の渇きの果てに、このインドのガンジス河の辺、聖地ヴァーナラシー(ベナレス)に大津を探す。大津はもしイエスがこの場におられたら、やはり行き倒れを火葬場に運ぶだろうと彼女に言う。イエスは弟子たちに復活されたのではなく、転生されたのだとも。そしてイエスは皆のなかにいると。大津の神はここに至ってキリスト教の神ではなく、より根源的で無限定な神、愛の魂でしかないものと捉えられている。じつに神はキリスト以外の多くの名を持つのだ。ここにはもはや第二バチカン公会議⁹以前のローマカトリック教会のテーゼ…教会の外に救いなし Extra ecclesiam nulla salus という排他主義 exclusivism は見られなく、(ここにあるのは宗教的多元主義 religious pluralism の立場

に他ならない。

遠藤はインタビュ(『読売新聞』夕刊 1993. 7. 16)のなかで「若いころ、私は一神論と汎神論は対立するものだと思っていた。しかし一神論は汎神論をも包み込む。今はそう思う。」と述べている。この言葉は一体、どう解釈すべきなのか。勿論、遠藤の真意は、その直後に「例えばシャルトルの大聖堂にある聖母マリア像は、土地の大母神なんだ。その上にカトリックのマリア信仰がある。」と述べていることから、「一神論は汎神論を包み込む」という言葉は、歴史的にキリスト教は宣教された地域の神々の信仰を吸収していったと言う意味である。しかしこの言明はまた同時に「究極の実在は各々の宗教の神的存在に先立つ」とも読めるのではないか。そしてまた遠藤の一神論と汎神論の対立の解決は、そのようになされたと思はる。

インドを舞台に復活ではなく転生(遠藤は仏教・ヒンズー教的な転生概念を故意に拡大解釈して使用している)、そして汎神論的な装い。ここにはキリスト教の枠を大幅に踏み越えた主張がある。チャームンダ女神は繰り返し現れ、時には聖母マリアと対比される。インドの母なるチャームンダはインド人とともに苦しむ女神で、それはインド的な受難のすべてに耐える象徴なのだ。彼女は聖母と異なり、清純でも神々しくもない。むしろその姿は醜く、汚れてさえる。しかもなおお婆びたその乳房から飢えた子らに乳を与えようと努めている。

最後まで滑稽な虚しい仕事に生きざまを示す大津の生き方に、

口では反発しながら美津子は魅きつけられる。彼女はやがて回心にいたるのか。彼女は深い河の前に祈る。

「信じられるのはそれぞれの人がそれぞれの辛さを背負って深い河で祈っているこの光景です。その人たちを包んで河が流れていることです。人間の河。人間の深い河の悲しみ。」その河の中に彼女は入って行く。大きな存在に祈りながら沐浴するため。沐浴すれば転生（罪を許され他の存在へと生まれ変わる）するのだ。大津のいう、「玉ねぎ」よりももっと深い、大きなものの懐に抱かれて。明らかに彼女の回心と救いは予告されている。

マザーテレサの尼さんたちに向かって彼女は問う「何のために、そんなことをなさっているのですか」とすると修道女の眼に驚きがかび、ゆっくり答えた。「それしか……この世界で信じられるものがあります。わたしたちは」それしか、と言ったのか、美津子にはよく聞き取れなかった。その人と言ったのなら、それは大津の「玉ねぎ」のことなのだ。この際、究極的実在を人格的なもの「その人」と受け取ろうが、非人格的なもの「それ」と受け取ろうが、それは問題ではない。ただ大津とともに作者遠藤はそれを秘かに「玉ねぎ」と告白するだけだ。

5. 『深い河』は成功作か

『深い河』は伝統的なキリスト教の枠組みから見れば極めて危険

な書である。それは『沈黙』の比ではない。沈黙はユダ論であった。ユダ論はキリスト論の内にある。そこには究極的な価値である愛（慈悲、憐憫）の実践のため、棄教（背教、転向）の容認と言う緊急避難的な選択の主張があった。が司牧的なリゴリズムを離れて見れば、キリスト教本来の思想と必ずしもあい容れないものではなかった。しかしこの『深い河』には汎神論の弁護さえある。大津は「キリスト教にも仏教にもヒンズー教の中にも同じ神は在る」と言う。これはまさにキリストの名によらない救済を認める立場だ。カトリックが諸宗教にも対等の資格を認め積極的な対話を進めるように変化したとはいえ、正統思想の立場からすれば、K・ラーナー的な包括主義の立場を踏み越えることは出来ないのであろう。教会はキリストの名まで捨てることを容認してはいない。高柳俊一師の説くごとく、キリスト教がキリストのみ名による救いを捨てて、多元主義にまで進んでしまえば、もはや「自らの根源的拠り所を失い、海図なき無意義の闇夜を迷走することになってしまふ」⁽¹²⁾からである。

そう言う意味で、この作品において西欧キリスト教を日本人のキリスト教、否、普遍的キリスト教について改変したかの遠藤の試みは失敗を隠さない。理由はそこにもはや「キリストの名」が存在しないからである——と断罪することさえ可能である。

しかし他方、自らの信仰的立場としてはキリスト教に依るが、その信仰の対象たるキリストは必ずしも従来からのキリスト論のキリ

ストである必要はない。ヒンズー教や仏教による宗教的体験のさなかにさえ究極的実在は実感されるという立場もあり得る。何故なら無名のナザレ人はキリストを主張しなかったし「宣教の座」、成立以前には名よりも、むしろその「愛の実践」が重んじられたのだから。そう言う観点から、つまり宗教多元主義の立場に立つならば、遠藤のこの挑戦は日本におけるキリスト教受容の局面に、新たなそして真に貴重な一石を投じたものとさえ言い得るのではなからうか。私はむしろその立場に立ちたいと願う。

- (1) 受容の型…埋没型、孤立型、対決型、接木型あるいは土着型(対決を底にひそめつつ融合的に定着、背教型の五種類、『土着と背教』新教出版社、p.5 参照。
- (2) 「接木の理」『聖書之研究』第307号、『著作集』岩波書店、第8巻。p.305 参照。
- (3) 「父の宗教・母の宗教」『石の声』冬樹社、pp.137-138。
- (4) 『日本とイエスの顔』講談社、p.65。
- (5) 「父の宗教・母の宗教」、前掲書 p.139。
- (6) 同 pp.192-193。
- (7) 今川憲次『カトリック小説考』南雲堂、p.241 参照。
- (8) 『世紀』1966年7月号、p.3。
- (9) ヨハネ三世その後パウロ六世により教会の現代化を目的に開催(1962-65)された。画期的な内容(典礼の刷新、諸宗教との対話、教会一致運動、信徒使徒職の制定等)をもつ。南山大学監修『第二バチカン公会議公文書全集』中央出版社参照。
- (10) 「神々と神と」『異邦人の立場から』講談社、pp.13-20。

(11) Karl Rahner, *Theological Investigations*, vol.5, Longman & Todd.

(12) 『上智大学キリスト教文化研究所紀要11号』p.73。
(かねこ・たてお、西洋哲学、湘南工科大学助教授)